Osaka University Knowledge Archive

Title	イギリス近代フェミニズム運動の研究-運動の形成・発展とその周辺-
Author(s)	河村, 貞枝
Citation	大阪大学, 2000, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.11501/3178765
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【17】

氏　　名	河村貞枝（かわむら さだえ）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学位記番号	第　15749　号
学位授与年月日	平成12年10月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文名	**イギリス近代フェミニズム運動の研究** **―運動の形成・発展とその周辺―**
論文審査委員	（主査） 教　授　川北　稔 （副査） 教　授　竹中　亨　　助教授　藤川　隆男

論文内容の要旨

本論文は、19世紀から20世紀前半にかけてのイギリスにおけるフェミニズム運動の生成・発展史を、多様な角度から跡付けたものである。全体は、400字詰原稿用紙換算で1340枚ほどに達する大作で、四部からなり、序論とあとがきが付されている。

まず、序論で、研究史の現状と「女性史」としての本書の基本視角が提示されたのち、第一部「ヴィクトリア時代のフェミニズム」では、いわゆるジェントルマン階級の価値観が優越したイギリスにおける、フェミニズム成立の特異な社会状況が分析される。すなわち、イギリスにおけるフェミニズムの成立過程は、「困窮したジェントルウーマン」の問題、いいかえれば、レイディとしての社会的規範の強固な存在と、時代の「女性あまり」現象などを背景に、ジェントルマン的価値観の優越した上・中流階層の結婚市場で成功できず、当該階級からの脱落の危機に陥った女性たちの問題に、決定的に彩られていた。「困窮したジェントルウーマン」の最大の職種となった「ガヴァネス」の処遇改善のために、女性の中・高等教育が求められていくというのが、運動の成立・展開の基本的な筋道である。

フランス革命＝産業革命期にメアリ・ウルストンクラフトとともに始まった女性解放の思想は、19世紀中期以降、バーバラ・スミスやベッシー・パークスら、いわゆる「ランガム・プレイス・サークル」によって、*The English Women's Review* が刊行されるようになって、女性解放をめざす明確な「運動」となった。しかし、その中間に、女子教育の拠点としてのベドフォード・カレッジの創設に成功したエリザベス・リードを中心とするミドルクラスの女性たちの集団（本論文のいう「ヨークテラス・サークル」）の活動があった。

第一部で展開されたイギリスのフェミニズム運動の成立と展開の歴史の、より広い背景を論じたのが、第二部「ヴィクトリア時代の家庭と女性――フェミニズムの周辺」である。ここでは、伝統的でコンヴェンショナルなヴィクトリア朝女性像の修正をめざして、20世紀前半に至るまでの中流女性の生活実態とその心情が分析される。まず、ブロンテ三姉妹を例として、階級脱落の危機にさらされた結果、文筆という男性的とみなされていた職場に進出することで対応しようとした女性たちの事情をとりあげる。つづいて、中流家庭における女子教育を分析し、そこで性別役割分担や「フェミニニティ」がいかにしてすり込まれたか、つまり、ミドルクラスの家庭における女性の社会化の過程がたどられる。ここではまた、19世紀末から始まり、両次大戦中に急速に進展した家事労働の機械化についても議論されており、通説に反して、機械化は、ミドルクラスの女性の解放には積極的な役割を果たしえなかったとしている。さらに、ヴィクトリア時代のミドルクラスの家庭における家事使用人の意味やその実態、「新しい女性」の登場を、

たとえば、サイクリングの流行との関連でとらえる、ジェントルウーマンのレジャーについての分析なども展開されている。

こうした分析を前提として、第三部「イギリスにおける婦人参政権運動の展開」では、ジョン・ステュアート・ミルにはじまり、19世紀末以来の婦人参政権協会全国同盟や20世紀初頭に成立する女性社会政治同盟などに引き継がれていった、女性の参政権を求める運動の歴史的分析がなされている。とくに、従来、比較的軽視されがちであった婦人参政権協会全国同盟の運動を徹底的に追求し、この組織に女性の参政権運動の主体を見るのが、本論文全体の中心的な課題となっている。したがって、この同盟の歴史については、その成立期、急速に過激になっていく女性社会政治同盟と対抗していった第二期、自由党のみならず労働党との関係をも強化していった大戦前夜の三期に区分して、詳論している。ちなみに、世界大戦は、生産などの社会的活動への女性の参加を必然的に要求したため、戦後、その報奨として女性の参政権が部分的に承認されたという通説的解釈に反して、戦争による混乱は、むしろ女性の政治参加を遅らせたことも、主張されている。さらに、この同盟と対抗したミリタントな組織、女性社会政治同盟が先細りとなっていった事情にも言及する。最後に、フェミニズムの運動は、本質的にミドルクラス的・ブルジョワ的であったが、その運動が、女性という枠組みが階級縦断的であるがゆえに、階級の壁をこえて女性の労働組合結成の運動に刺激となりえたことが説かれる。

さらに第四部「イギリス帝国と女性」は、フェミニズムと帝国支配の関係をインドを中心に分析している。植民地への移民行為がイギリス人女性にとっては、新たな活動の舞台を提供し、女性解放を促進する役割を果たしたと評価する一方で、イギリスのフェミニズムには、帝国支配や文明化の使命論的な発想を無批判に体現する側面もあったことが、論じられている。

論文審査の結果の要旨

一般に、女性史ないしジェンダー史の研究は、今日、歴史学の主要課題となっており、研究の対象や方法も、複雑かつ多様になっている。そうした状況のなかで、本論文は、社会史的な研究動向を広くふまえ、最新の女性学の展開をも視野におきつつ、しかし、あくまで、社会運動史としてのイギリスにおけるフェミニズムの成立と展開を跡付けた、きわめてオーソドックスな研究である。なかでも、イギリスにおけるフェミニズムの研究史上、ミッシング・リンクとなっていた19世紀中葉について、「ヨークテラス・サークル」の活動を位置付けた点、また、女性の参政権運動をめぐる二つの組織の役割についての総合的分析などは、研究の現状からしてとくに重要な意味をもっている。

ヴィクトリア朝女性の生活史にかんしては、汗牛充棟ただならぬほどの啓蒙書が巷にあふれているが、厳密な歴史学の立場から評価できるものは少ないのが実情である。本論文は、ミドルクラス女性の手になるフェミニズム運動の展開に焦点をあわせているものの、その背景として、ミドルクラス女性の生活史の分析をふんだんに含んでおり、彼女たちの生活の全体を彷彿させるところもあり、生活史の研究成果としても十分に評価できる。

既発表の著作がベースとなっているだけに、構成上、多少の重複が見られること、補論とされている論考のいくつかは、さらに手を加えることで、本文に抵抗感なく吸収できたのではないかと思われることなど、若干の瑕疵を指摘することはできるが、本論のイギリス史、および女性史研究史上の意義を損なうものではない。したがって、本研究科は、本論文を博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。